

植	物	
防	疫	
講	座	

虫害編-3

イネドロオイムシの発生生態と防除

元宮城県古川農業試験場 き城 どころ たかし
隆

はじめに

イネドロオイムシ（イネクビボソハムシ）*Oulema oryzae*（コウチュウ目：ハムシ科）は、古くから北海道や、東北・北陸地方等の寒冷地を代表する稲作害虫である。江戸時代後期に書かれた「除蝗録」にある「小金虫」は、その生態の記述からみて本種の可能性が高いという。日本全域や中国大陸のほか、台湾にも分布するが、いずれの地域でも年に1回の発生である。稚苗機械移植栽培が普及した1970年代に、同じく本田初期害虫と呼ばれて多発したイネハモグリバエやイネゾウムシが、急にその勢力を凋落させたのと対照的に、本種は今も北日本地域を中心にイネミズゾウムシと並ぶ主要害虫の地位

を維持している。その地域性は、要防除水準を設定している地域が、寒冷地に偏っていることによく反映されている（図-1）。年間発生回数が少ないにもかかわらず、様々な系統の薬剤に、繰り返し抵抗性を発達させてきたことも本種の特徴である。

I 形態

成虫は、体長4~5mmである。このグループのハムシ類は胸部が細いことから、標準和名にクビボソハムシと付くものが多い。頭部は黒色、翅鞘は光沢のある青藍色、胸部と脚は黄褐色である（図-2）。胸部の黄色が目立つために、ホタルムシと呼ぶ地方もある。雌雄には微妙な形態差が腹部腹板に認められるが（佐藤，1980）、検鏡しなければ判別は難しい。

卵は長さ0.8mm、幅0.4mm程度で、10粒前後の卵塊として産まれる。産卵直後は黄色であるが、間もなく褐色に、さらに黒褐色に変化する（図-3）。

幼虫は頭部は黒色、胴部は淡い暗黄色であるが、ふ化直後や脱皮時、営繭時期を除けば、自分の排泄物を分泌物と混ぜ合わせて背側に載せている（図-4）。害虫名はこの特徴を示したものだが、地方によってはドロッコ、ドロカツギ、コエカルイ（フンを背負うの意）等とも呼ばれる。ふつう4齢を経過して蛹化する。

蛹化時に幼虫は排泄物を脱ぎ捨て（図-5）、口から泡状の物質を分泌して長さ5mm、幅3mm前後の繭を作る（図-6）。繭は初めは白色だが、日時の経過とともに淡褐色となる。

II 生活史

越冬は、成虫が水田周辺のササ、ススキや立ち枯れ状態の大型イネ科植物の葉鞘部等の隙間に潜入して行われる（以下、時期については、宮城県を念頭に記述する）。越冬後成虫は、5月に入ったところから時折出現する初夏を思わせる気温の高い日に、越冬地を離れ繁殖地である水田等へ移動する。その時期は平年では5月中・下旬であるが、高温日の出現時期には年次変動があるため、成虫の移動時期も年次によって変動する。図-7に成虫の

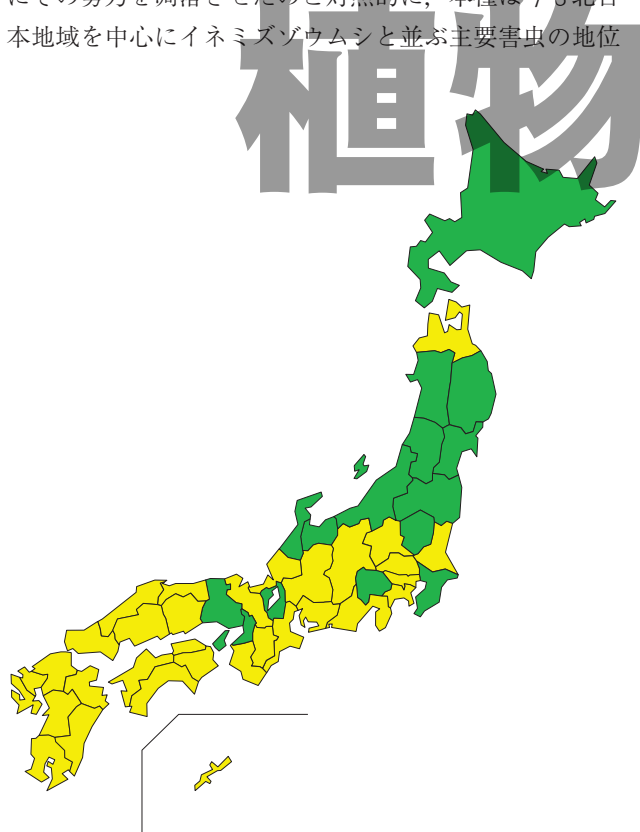


図-1 イネドロオイムシの要防除水準を設定している道府県（緑）
2016年調べの日植防JPP-NETにより描く。

Ecology and Management of Rice leaf beetle, *Oulema oryzae*.
By Takashi KIDOKORO

（キーワード：イネドロオイムシ，生活史，発生予察，管理法）